



輝け! けんせつ小町

所長

須田久美子 ● 東京外環地中拡幅準備事務所 中央環状品川線北行き工事たんぼ活動チーム

1982年、一人の女性が総合職として大手ゼネコンに入社した。
男女雇用機会均等法施行前の当時、
建設会社に一般職以外で女性が採用されるのは極めて異例だった。
技術研究所勤務から、その研究実績を活かしての設計・現場勤務、
さらに最新工法を開発して女性現場所長へ…。
「けんせつ小町」の先駆者ともいえる女性所長に、
入社の際やこれまでの職歴を語ってもらった。

Shine 輝く、わたしの姿



工事現場のない「所長」

所長・須田久美子の現在の職務内容を一言で説明するのは難しい。所属する鹿島建設・東京土木支店では、二〇二〇年の開通をめざして整備が続けられている東京外環自動車道・都内区間の東名ジャンクション（仮称）と中央ジャンクション南（仮称）の二カ所の地中拡幅部工事について、技術開発業務を請け負っている。提案している地中拡幅工法が実際に成立することを確認するための準備事務所の所長、言わばプロジェクトリーダーが、今の須田の肩書だ。事務所は同社・技術研究所内にある。

「大変難しい工法開発です。技術研究所や協

自分の夢に関係ないと

思えることも、

ちやんと続けていければ

将来自分に返ってくる

20年以上にわたって研究生生活を送った鹿島建設・技術研究所。「いろんな分野のスペシャリストが集まっていて、しかも教育機関や他社の研究者・技術者とのネットワークがある。ここ出身ということが、現場に出てから非常に役立ちました」

「モノづくり」への憧れが高じて

須田久美子は一九五九（昭和三十四）年、茨城県生まれ。おままごとよりも砂場で山やトンネル造りに熱中するなど、子供のころからモノを造るといふことに強い興味を持っていた。

「小さいころ、よくテレビで工事現場が舞台のドラマや映画をやっていたんです。それで『あんな風にとくさんの人がかわって大きいものを作っていくのは面白そうだな』と、自分も造ってみたいなと思ったのがきっかけですね」

大学受験の際、入学案内を見て目に飛び込んできた写真が、その後の進路を決定づけた。

「アーチダムの写真が見開きでバーンと載っていたんです。その時『これを造りたい!』と思って、よく見たらそこに土木工学科って書いて

力会社の施設も借りて、複数の実験を並行して進めながら十カ月間という短期間で検証しなければならぬので、こうして技術研究所に事務所を構えています」

技術開発と工事を別々に発注する調達方式であり、工法が正式に認められたとしても、施工まで担当できるかどうかはわからない。しかし、「もし工事をウチがやることになったら、工事現場の所長を任せてもらいたい。そうなれるように、まずは工法開発をがんばっているところですね」





土木技術者に、
女性も男性もない。
女性であることに甘えず、
今、目の前にある仕事を
一所懸命やるのが大切

わたしが伝える

Sender

Profile

すだ・くみこ ● 1959(昭和34)年、茨城県生まれ。中央大学で土木工学を専攻。卒業後、鹿島建設に土木・総合職として入社。技術研究所に配属され、コンクリート構造物に関する多数の研究に従事。その後、土木設計本部、圏央道・裏高尾橋工事、首都高速中央環状品川線・五反田出入口工事の現場を経て現職。五反田出入口工事の現場では「なでしこ工事チーム」のリーダー。「(一社)土木技術者女性の会」では人材育成担当の運営委員として数々のPR活動を主導。2008(平成20)年、日経ウーマンの「ウーマン・オブ・ザ・イヤー2009」受賞。いばらぎ大使も務める。2児の母である。

研究で培ったことを現場で活かす
念願だった現場勤務が実現したのは、二〇〇七(平成十九)年。自身も設計にかかわった圏央道・裏高尾橋の現場に副所長として出られることになった。

と生産体制づくりに奔走した。

「私のいいところは、常に前向きに考えられること。やれと言われたらそれを『自分の仕事だ』と、三ミリの鉄筋を造ることにかけては日本一になってやろう、と思ったんですね」

町工場に通って、実際にできる方法を模索し、直径三ミ、長さ三ミ以上の縮小鉄筋の量産体制を整えた。こうした技術研究所での長年の研究が、後に現場に出た時に実を結ぶことになる。

希望部署ではなかった
技術研究所での奮闘

ゼネコンにまだ土木総合職の女性採用枠がなかった時代に、「とにかく建設現場で働きたい」という一心で、大学の先生から当時の社長に頼み込んでもらい鹿島に入社したのが一九八二(昭和五十七)年。すぐにでも現場に出たかったが、配属されたのは技術研究所で、それから二〇年以上、コンクリート構造物に関わる研究に従事することになった。

新人の時に最初に任されたのが、三ミリの異形鉄筋をつくる仕事。「一民間企業の鹿島がそこまでして実験をやるのかっていうところにまず驚きました。大きなものを造りたくてゼネコンに入ったのに何でこんな小さなものを?とはじめは思いましたけど…」

土木構造物は規模が大きすぎて実物大の構造実験ができないため、十分の一などの縮小サイズの模型を製作する。鉄筋コンクリート造の場合は使用する鉄筋も合わせて縮小する必要があるが、六ミ未満の異形鉄筋は世の中に存在しなかったため、模型の縮小サイズに対応した直径三ミといった特製の鉄筋を量産する方法の確立



上/須田にとって初の工事現場となった圏央道・裏高尾橋。基礎、橋脚から上部工まで設計施工一括受注で、発注者からの要望へのきめ細かい対応が求められた。

左下/裏高尾橋の詳細設計で行った実験試験体製作の様子。帯鉄筋に3mm異形鉄筋を使用している。実橋脚を忠実に1/10にした縮小模型試験体で橋脚の耐震性能を確認した。

右下/学生時代のアルバイト風景。「設計コンサルタントや測量事務所、公益民間の研究所などいろいろなアルバイトをしましたが、工事現場は天職だと思いました。大学の先生が『社会に出たら難しいだろう』と知り合いの会社に頼んでくれて実現しました」(提供:鹿島建設株)

ある。建築と土木の違いもわからずに、単純に『これを勉強すれば、こんなダムを造る人になれるんだ』と考えて土木工学科を選びました」

チームで輝く!

中央環状品川線 北行き工事 たんぽぽ活動 チーム

上／五反田出入口工事の現場では、社内初のなでしこ工事チーム「中央環状品川線北行き工事たんぽぽ活動チーム」を結成・登録。須田がリーダーとなって、女性の働きやすい職場環境整備を推進した。

左下／東京都PTA連合会などPTA役員時代のつながりで高校生のキャリア教育活動も展開。「お母さんが『世の中にはこんな面白いような仕事があるのよ』って言ってくれないと、子供たちに伝わらないので」

右下／創立33年を迎えた「(一社)土木技術者女性の会」。現場見学会や女子学生向けのキャリアセミナーなどで職業としての土木の魅力をアピールし、次世代育成に力を入れている。

(提供：鹿島建設株)



Team

わたしたちが造る

「この裏高尾の所長がすごく柔軟な考え方で、コンクリートの新しい構造や材料に詳しい私を見て、そういう分野の専門家として現場に呼んでくれたんです」

さらにその三年後には、首都高速・中央環状品川線・五反田出入口の現場に請われて兼務となり、こちらでもトンネル工事のさまざまな課題解決に貢献した。

「橋とトンネルの現場を兼務というのは珍しいことです。技術研究所時代に専門技術を地道に研究してきたおかげで、いろんな現場を経験できました。自分の夢に関係ないと思うこともちゃんと続けていけば、将来きつと役立つということを実感しました」

「土木技術者」に、女性も男性もない

建設現場には珍しかった女性土木技術者の草分けとして、土木の仕事を広く知らしめる活動にも心を砕いてきた。

「常に自分に言い聞かせているのは、土木技術者としては女性も男性もない、ということ。女性だからやりにくいと感じたら、それは自分が人間的に未熟だからと考えています。女性であることに甘えず、今、目の前にある仕事を一所懸命にやることを心がけています」